

『昭和61年度における研究開発計画の概要』

昭和60年度においては、放送大学が4月に開学し、放送教育開発センターの主要任務の一つである放送大学との協力は、新しい局面を迎えることになった。放送教育開発センターのスタジオをフル稼働してその番組制作に協力し、迎え入れられた第1期の入学生を対象に新しい学生の実態を調査し、さらに新しい学習の在り方を探求する研究プロジェクトが実施された。

放送教育開発センターの使命は、放送大学の使命と重なり合うもので、①すべての学習希望者に大学教育を公開し（公開性）、②遠隔地に居住する学習者に大学教育へのアクセスを確保し（遠隔性）、及び③放送、印刷物、ニューメディア等多様なコミュニケーション媒体を大学レベルの学習に使用する手法（多媒体性）を研究開発することにある。

昭和61年度における研究開発の課題は、上記の使命にそって、一方番組制作及び研究開発面における放送大学との連携協力の推進とともに、国立大学共同利用機関としての共同研究と研究開発の任務を推進することを目指して設定された。今年度に取り上げる課題は、別記の通りである。

これらの調査研究の成果は、逐次本センターが月刊で刊行する『MME研究ノート』において報告するほか、各研究担当者の関係する学会誌・学会等において発表し、また放送大学と共催して実施する予定の国際シンポジウム及び大学放送公開講座実施大学・放送局・民間教育放送協会と協力して実施するシンポジウム及び研究会、その他の方法によって公開していく予定である。

特に今年度からは、実験スタジオも整備され、受入れ体制がようやく整ってきたので、共同研究、情報交換などを着実に進めて行きたいと考えている。基礎的な研究の分野でも、番組のタクソノミーの研究や印刷教材の類型的・構造的検討、遠隔高等教育に関する基礎情報の収集、映像情報のデータベースの構築等の研究及び事業の実施にあたっては、共同研究体制を取って推進する。なにかんづく映像情報のデータベースの構築は、必然的にわが国最大の高等教育映像情報源となるばかりでなく、放送大学その他諸大学の番組制作に貴重な手が

かりを与えるものとなり、また放送による学習システムを研究開発して行く上での基本的なリソースとなることが期待される。

全国の教員養成関係教官の協力を得て昨年度から研究開発を開始した教師養成のためのビデオ教材は、第1期シリーズ7本を世に問うているが、今年度及び以降も、時宜に適ったテーマを選んで、継続的に研究開発を進める。同様に全国の高等専門学校と協力し、専門分野の研究者の積極的な参画を得て研究開発を試みている高専ビデオ教材は、今年度においては、バイオテクノロジーの分野において試行と評価を実施するとともに、教材としての完成を目指す。さらにその分野の教材についても、研究開発を検討する。

北海道から沖縄までの10国立大学と各地の放送局の協力によって実施されている大学放送公開講座は、昨年度において琉球、信州両大学がその番組を地域社会への大学教育の公開及び複数の大学キャンパスにおける講義の実践に道を開いたが、今年度は、さらに四国地域において複数の大学が参画して実施する新機軸を実行に移す。私大通信におけるラジオの活用においても、今年度は、その利用目的、放送時間、番組の構成方法等を改革して教育効果を検討する試みが行なわれる。

遠隔高等教育におけるコミュニケーションの方法を将来に向けて改善強化する可能性を探って研究を進めている分野では、昨年度から地方自治体の社会教育との共同事業として開始した遠隔地における放送大学の放送番組のCATVによる受信、地方自治体による学習援助インフラストラクチャの提供、本センターによるコンピュータ通信およびファックスを活用しての双方向遠隔学習指導を組み合わせた実験研究が、本年度はほぼ本格的に軌道にのる。またニューメディア開発協会との協力のもとに、昨年度までHi-OVIS市民大学講座として実施してきた完全双方向テレビによる教育方法の実験研究は、今年度は視点を転回し、各地のCATVをリンクした市民大学講座の試み、即ち地域の参加と全国のリンケージの可能性と問題点の検討に移行する。これらの実験ないし研究開発の成果は、放送大学の全国化及び全国諸地域の放送大学の積極的利用ないしは地域の主体性のもとでの高等教育へのアクセスの全国の普及

に、具体的な示唆を提供できるものになると確信している。

コンピュータ通信，ファックス，双方向テレビ，CATV，静止画テレビ，通信衛星による遠隔会議等，遠隔高等教育におけるテレビ，ラジオ，印刷教材スクーリングの4基本メディアの限界を補完する可能性の高い諸メディアについて，その先端について調査と評価の努力を継続するが，同時に，これらについては，できる限り実験を行ない，その結果は，遠隔高等教育への利用に際しての具体的な課題を中心に，逐次報告していきたい。